

書評

茨木 保 著

まんが 医学の歴史

木村政司

日本の科学リテラシーの普及に貢献する医学史
曼陀羅

日本歯科大学新潟生命歯科部に、日本で唯一の医の博物館がある。ここは医学の歴史において残された貴重な古医書や浮世絵、医療器具、道具など約 5 千点が展示、保存されている。この博物館の特徴は、医の歴史を眺めているうちに、見終わる頃には医の文化が見えてくることだ。

まんが 医学の歴史は、医の歴史が面白おかしく読み取れるだけではなく、偉人たちが伝えた貴重な遺産と、関わった人々の情熱にグイグイと引き込まれる。そういう意味では表現は違うが、医の博物館と本書の感動には、似たところが感じられる。

科学は、同時代の科学者たちの火花の散らし合で発展してきた。コンプレックスや嫉妬、怒りや悲しみを乗り越えたところに科学の発展があったと言っても言い過ぎではない。

もうひとつ大切なことは、医学にとってノーベル賞を受賞する研究成果だけが全てではないということだ。科学離れが騒がれて、もうずいぶん経つが、いまだに深刻な問題であり、決して他人事ではない。これは学校教育に限らず、社会全体に問題があることは間違いない。この国の科学技術力は、人々の科学力向上にかかっている。このことを意識して書かれたかどうかよりも、この本を、広く一般、学生、教師、医師、研究者等に読んで欲しいと心から願う。

漫画は、もはや日本が世界に誇れる文化である。医の探究なくして人類の発展はなかった

し、人間が自然の謎にどこまで迫ったかは好奇心を駆り立てる問いであり、文化である。

著者、茨木保氏は婦人科医でありながら、漫画家である。漫画という手法で書き上げたことよりも、偉人たちのストーリーが、著者の感動を通してそのままヴィジュアルに伝わるパワーに共感する。そういう意味では、本書は医学史曼陀羅と言ってもいい。

古代ギリシャの医神アスクレピオスの杖には知恵と神秘の象徴である一匹の蛇が絡まり、伝令の神ヘルメスの杖には、医と薬の象徴である 2 匹の蛇が絡まっていると言われている。いずれも医の象徴として有名だが、2 匹の蛇の方は「サイエンスとアート」の調和を表しているとも言われている。サイエンスが技術なら、ここでのいうアートとは、幸福と富裕を目指す叡智のことである。蛇は何度も脱皮して若返ることから再生と不死身のシンボルである。つまり、生きものの知恵からイメージし、強い連想へと駆り立てる表現は、まさにアートといっていーいだろう。

本書は、このヘルメスの杖に絡まる 2 匹の蛇のように、サイエンスとアートの調和が見事に、日本の科学リテラシーの普及に貢献し、医学の知識やものの見方を世代間に継承する方法として、力を授けてくれるものであると確信する。

(サイエンティフィック・イラストレーター)

●A5 356 頁 2008 定価 2,310 円(本体 2,200 円+税) 医学書院